〈調査報告〉

「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」について

長佐古　美奈子

はじめに

「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」は、戦前の旧制学習院中・高等科の歴史地理標本室に所蔵されていた標本類ならびに発掘資料類を指す。現在、史料館が収蔵しているものは二五二件、総点数約五〇〇点である。

歴史地理標本室がいつ発足し、どのような教科要綱のもとに資料類が収集されていたか、何点の収蔵品があったのかなどについては『学習院百年史』[1]に記載がなく、その他の記録類もないので、現在のところ詳しい状況はわかっていない。設置されていた場所は、現在の西一号館三〇七・三〇八教室であった。

大学図書館に『標本原簿(地理)』『標本原簿(歴史)』という二冊の原簿が保管されており、歴史地理標本室の収蔵

品の一部については名称、入手経路、購入価格などが判明する。この標本原簿によれば、地理は大正一二年(一九二三)五月一日に「温突(オンドル)」を八三円六〇銭で購入し、それを「登録番号一」としているものから始まり、昭和一四年(一九三九)五月一二日に「登録番号三二四　日本水産地図」を斎藤福治より二五円で購入した記録をもって終わる。一方、歴史は大正二年(一九一三)三月一五日に「登録番号一　御紋章入三ツ組銀盃(故乃木院長遺物)」から始まり、昭和一九年(一九四四)に「登録番号二二二一　満蒙の喇嘛教美術(支那文化史蹟第二)解説添」を法蔵館より三五円で購入した記録にて終わる。

標本原簿の地理と歴史の登録番号を合計すると五四六点である。しかし原簿の間に挟まって、「西カロリン諸島サンサル島島民用敷物弐枚(中略)軍艦淀一等主計兵池田一郎寄付　大正九年十二月」などと記されたメモ類が何点かあること—この資料については標本原簿に登録されていない—、発掘資料については非登録であること、標本原簿に記載されていない資料類が現在史料館にかなり収蔵されていること、などから標本原簿が歴史地理標本室の全収蔵物をあらわしてはいないことが分かる。

歴史地理標本室資料が史料館に移管された経緯についても明らかではなく、移管に関する書類、記録もほとんど残っていない。史料館の『業務日誌』昭和五五年(一九八〇)五月二九日の項に「図書館から戦前の学習院、地理歴史標本を受け取る」との記事があるが、この記事にしても、どの資料の移管を受けたのか、全部で何点だったのかなどの詳細は不明である。

ただし「No.295(No.〇〇〇は史料館における整理番号、以下同様)〜No.302奏任官束帯(名称は今回の整理による名称、以下同様)類」、「No.305地球儀」、「No.306マーシャル諸島武器・パラオ諸島武器及び漁撈具」については平成元年(一九八九)三月七日に図書館より保管転換の要請を受け、史料館に移管したことがわかっている。

史料館初代助手の篠沢治子氏(昭和四八年(一九七三)〜昭和五一年(一九七六)、史料館前身の文学部史学科史料室時代からの在任)によれば、文学部史学科史料室が図書館別館の蔵に開設された時には、もうすでに、その蔵の一階部分に高松宮殿下寄贈資料の「No.293マーシャル諸島カヌー模型」「No.294パラオ島アバイ模型」などが収蔵されていたということである。

おそらく昭和二四年(一九四九)の大学開設に伴い、西一号館が中・高等科から大学に引き渡された時に、歴史地理標本室は分裂をし、あるものは図書館に、あるものは中・高等科に移管され(後述の輔仁会史学部発掘調査出土資料など)、そのうちの図書館に移管されたものの一部が何回かに渡って史料館に移ったと考えられる。(現に史料館以外にも、院史資料室、東洋文化研究所に歴史地理標本室資料が所蔵されていることが、今回の調査で判明した。[2])

史料館に移管された資料は昭和五九年度(一九八四)に粗い調査が一度なされ、収蔵点数などは概ね把握されていたが、詳細な整理までには至っていなかった。

今年度(平成八年度(一九九六))は目録刊行、資料公開、資料紹介を目的とした整理・調査を行った。目録は平成九年度(一九九七)に刊行の予定である。[3] 目録刊行に先立ち、この『紀要』九号において、歴史地理標本室移管資料の個別資料に関する論考が掲載されているが、ここでは資料群としての歴史地理標本室移管資料について、及び個々の資料に関する若干の報告をしたい。

一　教育研究資料群としての「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」

平成八年（一九九六）一月一八日の第一四期学術審議会学術資料部会で「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」と題する報告が了承された。「学術標本の収集、保存、活用体制の在り方について」という副題が示すとおり、国公私立大学での学術標本の保存と活用の充実を図るための一つの方策としての「大学博物館設置」の構想を示したものである。(4)

現在の日本の大学における学術標本の保存・活用状況は酷く、四分の三の大学に博物館・資料館等の学術標本を保存・活用する施設がなく、博物館的施設のある大学でも、ある一定の分野のものしか収集せず、他の分野で収集された学術標本は収蔵されていないことが多い。収蔵されている学術標本でもその多くは保存施設設備や人員の不足のために、ただただ保管されているだけの状態、それもいつ廃棄されてしまうのかわからないという危険性がある、というのが現状である。そこで、なんとか学術標本資料を収集、保存、活用しようという動きがおこったものが、前述のユニバーシティ・ミュージアムの構想である。この構想により、平成八年度（一九九六）より国立大学七校において、大学博物館を設置し、資料を保存することとなった。

では、戦前の旧制学校制度の標本資料などは、現在どのような保存状況におかれているのであろうか。「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」の類例については、いまのところ管見では発見できていない。同様の施設があった学校、同類の資料が残っているところは、おそらく、かなりあると想像できるが現在の大学での学術標本資料の処遇と同様、資料として認識されていなかったり、人手不足のために整理にまで手がまわらず、公開の俎上に上っていないのが現

状であろう。学校史を編纂する上で、組織や場所としての「標本室」を捉えることがあっても、ただ「存在した」というだけで記述は終わり、そこに収蔵されていた資料のその後や現在の状況についてまで触れる記述はない。

そのような状況の中で「旧制学習院歴史地理標本室」という組織の存在が確認され、その収蔵品である「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」が今回一括に近い形で、保存、整理、研究された、ということは、教育史的にも博物館学的にも先進的な試みといえる。

また、後述するように、標本資料の入手経路をたどることにより、「コレクションとしての意図」や「戦前の日本の体制をそのままあらわす一側面」としての資料、「学習院と宮内庁の関係」などを見ることもできる資料群である。旧制学習院と同時期に存在していた旧制高校などには同種の資料が存在していた可能性が高い。ぜひ資料の発見、整理、公開を待ち、コレクションとしての「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」との対比をしてみたいものである。

二　「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」の入手経路別分類とその例

「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」の資料入手経路は、前述の大学図書館蔵『標本原簿(地理)』『標本原簿(歴史)』により、半数程度については確定することができる。もちろん、この確定についても、当時の名称と現在考えられる名称とにかなりのずれがあるため、資料の一点一点についての詳細な比定作業を行わなければならなかった。

資料には『学習院歴史地理標本室1364』様のラベルが貼付、あるいはスタンプ[5]が押されている場合があるが、この「1364」という番号は標本原簿上には存在しない。「はじめに」において述べたとおり、地理と歴史のそれぞれについて

一から始まる登録番号がつけられており、各々三二四番、二二二番が最終番号で、四桁の数字はないのである。あきらかに原簿と一致する資料(たとえば『標本原簿(歴史)』「登録番号六七　魏画像石片」は『学習院歴史地理標本室1364』)の四桁番号を基準として、地理と歴史を合わせ、年代順に並べ替えてみたが、四桁番号は整然とは並ばなかった。

しかし、この作業の結果、資料の入手経路をある程度判明させることはできた。

その結果(一)購入、(二)移管、(三)寄贈、(四)発掘の四種の入手経路分類が可能となることがわかった。その分類に基づき、資料の紹介をしていく。

(一)購入資料

購入標本資料のほとんどが(株)島津製作所よりの購入であった。その他に各地物産博覧会、骨董商と思われる人物よりの購入も若干ある。

ほとんどの購入資料の入手先であった(株)島津製作所は大正〜昭和初期において、標本を製作していた国内最大手の企業である。しかし、現在同社に標本資料は現存せず、同社の標本部が戦後独立し起業した(株)京都科学にもその時期の学校教材標本は残っていない。わずかに、島津製作所島津創業記念資料館に標本の販売カタログ(以下、島津カタログと略)の『目録　地理と歴史(地理歴史学用標本及模型目録)』[6]が一冊展示されているにすぎない。このカタログを見ることによって当時どのようなものが標本として製作されていたか、またその中で学習院は何を必要と考えて購入し、何を購入しなかったかを推測することができる。

これらの購入資料は、「教材」であり、美術品的資料価値はあまり高くはない。しかし、当時の産業を知る上では貴重な資料となりうる。

例えば「№162オノコロ焼蓋付湯呑」は、大正一三年(一九二四)九月三日に島津製作所より一円で購入しているものである。おそらく島津カタログ中の「地理ノ部—地理学用標本—各種生産物及其工業品—6化学工業—B陶磁器」より選択して購入したものと思われる。しかし、現存する島津カタログは昭和五年(一九三〇)発行(昭和一〇年(一九三五)改訂発行)のもののためか、「オノコロ焼」の名称はない。ちなみにこの「オノコロ焼」窯は明治一六(一八八三)から兵庫県淡路島で開業していた淡路焼(民平窯)系の窯であるが、操業期間が短いため(創業者の田村久平は大正三年(一九一四)に没している)現物資料を見つけることが難しい。『原色陶器大図鑑』[7]にも写真の記載はない。学習院が大正一三年(一九二四)に購入した時点では「オノコロ焼」は手に入りやすい一般的な焼き物であったのであろうが、わずか六年後の昭和五年(一九三〇)にはもうすでにカタログから姿を消しているのである。

「№21〔朝鮮農民風俗〕男女人形」は、どこから入手したものなのか、正式な名称は何なのかはっきり特定ができていない資料のうちの一つである。(〔 〕は推定名称をあらわす)『標本原簿(地理)』「登録番号一四七　世界人種全身像五人種男女」(大正一三年(一九二四)九月三日(島津製作所より)二〇円で購入)の内の一体ではないかとも思われるが、島津カタログによれば、「世界人種模型(全身像)」の内容は「マオリ種族男女、バリ種族男女、イタリー種族男女、支那人男女、ユータ種族男女」であり、「朝鮮」は無く、内容的に相違している。

最近になり、岡山県の金光図書館に同種の人形が所蔵されていることがわかった[8]。金光図書館に所蔵されているものは、博多人形の祖型ともいえるもので、明治末期に博多人形師の井上清助が製作を始めたもの—「井上式元祖博多人形」—である。

井上式元祖博多人形は、明治末年に、それまで地場産業として細々と製作されていた博多人形作りを、博多人形を普及させようという意図のもと大隈重信を名誉総裁とし、坪井正五郎博士と関根正直を名誉顧問とし製作・販売され

た視聴覚教材で「埴輪模型」や「歴代服装模型」「日本帝国人種模型」などが作成されている。このうちの「日本帝国人種模型」は解説書によれば「日本が明治維新以後明治四三年(一九一〇)の韓国併合に至るまで、領土の膨張をみたことによって、北の千島・樺太から南の台湾に至る日本帝国の領土に多数の人種が住むことになった。そこで、それらの人種の模型を作り示した」という時代を反映したものである。内訳は「内地人」「朝鮮人」「琉球人」「ギリヤーク」「オロッコ」「台湾人」「台湾蕃人」「アイヌ」で男女一組づつ、八種一六体であった。おそらく史料館所蔵のものも、この一種(「朝鮮人」)と推測される。

今でこそ博多を代表する産物の一つである博多人形の原型をここにみることができる。この元祖博多人形は地元博多にも残っておらず、現在のところ金光図書館、弘前高校、東京大学総合研究博物館にその存在を確認できるのみである。

(二)移管資料

旧制学習院は宮内省の所管であった。当時帝室博物館(現東京国立博物館)、教育博物館(現科学博物館)も同様に宮内省の所管であり、同列の機関として、正式な書類なしで、資料の相互保管転換がなされていた。

旧制学習院の歴史地理標本室の資料中で「保管転換資料」と判明できるものは二点ある。『標本原簿(歴史)』中「登録番号五七　台湾全島地図模型」と「登録番号五八　岐阜市附近曲線模型」について「博物館ヨリ保管転換」との記載があるからである。残念ながらこの二点は史料館には所蔵されておらず、どういったものなのかは不明である。現学習院中等科生物教室は旧制学習院博物学教室所蔵の標本類を所蔵しているが、この中の「旧制学習院博物学科資料」の剝製標本の中には、保管転換を示す記載があるものがあるということである。

また、No.295～No.302奏任官束帯のセットは、昭和三年(一九二八)昭和天皇御大礼の際に奏任官が着装し、その後そのまま下賜されたものと同一のもので、この資料には宮内省よりの保管転換の書類がある。同一の装束のセットが、奈良、京都の国立博物館にもあるということであるが、学習院のものはなぜか未使用である。

(三)寄贈資料

資料の中には学習院の関係者からの寄贈資料も多数ある。寄贈者名には旧制学習院の関係者ということで、当然皇族や華族の名前が多い。当時の彼らは日本の政治の中枢を担っており、いわゆる「大東亜共栄圏」構想のもと植民地化した韓国や日本の委任統治下にあった南洋群島へ行き、様々な文物を手に入れた。その一部を学習院に寄贈し、学習院は歴史地理標本室に収蔵したと推測できる。前述した「No.21 [朝鮮農民風俗] 男女人形」同様、戦前の日本の体制がそのまま現れた資料群である。

高松宮殿下寄贈資料群(No.293 No.294 No.306)もそういった資料群のうちの一つである。高松宮宣仁親王は海軍大尉として昭和八年(一九三三)に聯合艦隊演習でパラオ方面に行っている。[9] おそらくその際に現地において寄贈されたものと推測される。国立民族学博物館の秋道智彌教授によれば、「No.294パラオ島アバイ模型」[10]は国立民族学博物館にも完形品がなく、かなり希少な資料であるということである。

また、寄贈資料の中で特筆すべきものとして明倫博物館(明倫中学校付属博物館)からの寄贈資料群がある。明倫博物館は尾張徳川家藩校「明倫堂」と「愛知教育博物館」に端を発する、我が国最古の私立博物館で、明治三四年(一九〇一)から大正一五年(一九二六)まで存続していた。この間、経営母体の変遷により、明倫博物館と称されたり、明倫中学校付属博物館と称されたり、名称も変化するが、その詳細な歴史について記すことはここでは略する。[11] 明倫

表1　明倫博物館移管資料

整理No.	名称	内容	年代	法量	数量	地歴ラベルNo.	添書き等	附属品	標本原簿	登録年月日	入手経路	備考
3	東福寺銘軒丸瓦片	瓦当のみ	江戸中期(18C前半)	外径18.7×外区内縁径13.2×瓦当厚3.2	1				歴史162東福寺及び仁和寺瓦28個のうち	S11.10.10	明倫中学博物館より移管	
28	アイヌ鮭皮靴	アイヌ語でケリ①完成品②未製品	近代	①12.0×24.0×18.2②20.5×42.3	2		①〔標本札〕鮭ノ皮ノ靴」北海道土人雪上歩行ニ用フ」明倫中学校付属」本館備品②〔標本札〕サケノカワグツ」北海道土人製品		地理286北海道アイヌ人衣服及用具	T15.9.1	愛知県立明倫中学校付属博物館寄贈	
29	仁和寺銘軒丸瓦片	瓦当のみ	江戸前期(17C)	外径13.8×外区内縁径10.2×瓦当厚1.9	1		〔貼紙〕京都御室御所		歴史162東福寺及び仁和寺瓦28個	S11.10.10	明倫中学博物館より移管	
35	岐阜県不破関跡出土平瓦片	凸面縄叩文，凹面布目	奈良（8C）	12.3×11.0×厚2.1	1		〔標本札〕明治四十五年二月十五日侯爵家ヨリ下付」本館備品	木箱〔箱書〕不破関古瓦一個〔蓋裏書〕明治四十五年十月十五日」奥方様美濃国関ケ原故蹟」御実視の同所附近ナル三輪」善四郎方ニ御休憩在ラセラル其」折同人ヨリ之ヲ献ス」因ニ当主ハ在関時ノ関守ナル」藤原朝臣末葉也ト云」	地理287陶器太古品破片共25個	T15.9.2	愛知県立明倫中学校付属博物館寄贈	

36	韓国忠清南道弘慶寺跡出土平瓦片	高麗瓦，凸面矢羽状叩文，凹面布目	高麗（11C前半）	12.0×10.9×厚2.0	1		〔標本札〕西暦紀元一千二十一ノ作ナリト云フ」二片共布目アリ」二片」大正五年九月十四寄付」弘慶寺ハ高麗王顕宗即位十二年竣工スト云フ」忠清南道天安郡成歡面弘慶」院里ニアル弘慶寺ノアトヨリ掘」出シタルモノ」寄贈清水元太郎〔墨書〕成歡」弘慶院」June, 14		地理287陶器太古品破片共25個	T 15. 9. 2	愛知県立明倫中学校付属博物館寄贈	弘慶寺跡＝大韓民国忠清南道天原郡成歡面大弘里320所在／No.45と同種
45	韓国忠清南道弘慶寺跡出土丸瓦片	高麗瓦，凸面矢羽状叩文，凹面布目	高麗（11C前半）	10.9×9.8×厚2.0	1		〔墨書〕稷山成歡」弘慶院〔標本札〕西暦紀元一千二十一ノ作ナリト云フ」二片共布目アリ」二片」大正五年九月十四寄付」弘慶寺ハ高麗王顕宗即位十二年竣工スト云フ」忠清南道天安郡成歡面弘慶」院里ニアル弘慶寺ノアトヨリ掘」出シタルモノ」寄贈清水元太郎〔墨書〕成歡」弘慶院」June, 14		地理287陶器太古品破片共25個	T 15. 9. 2	愛知県立明倫中学校付属博物館寄贈	No.36と同種

整理No.	名称	内容	年代	法量	数量	地歴ラベルNo.	添書き等	附属品	標本原簿	登録年月日	入手経路	備考
55	東福寺銘軒丸瓦片		享保5年東福寺修理	外径17.4×外区内縁径11.2×瓦当厚	1				歴史162東福寺及び仁和寺瓦28個	S11.10.10	明倫中学博物館より移管	東福寺＝京都市東山区本町所在
63	名古屋七ツ寺所用鬼瓦片	側面に「元禄三」のへら書きあり	江戸中期(1690)	9.7×9.8×23.2	1		〔朱書〕名古屋七ツ寺〔刻〕元禄三		地理287陶器太古品破片共25個	T15.9.2	愛知県立明倫中学校付属博物館寄贈	名古屋七ツ寺＝名古屋市中区大須2丁目長福寺。慶長16年(1611)現在地に移動。尾張藩主の祈願所
64	珠文縁東福寺銘軒丸瓦片	瓦当のみ	応永年間(15C初)	外径18.3×外区内縁径13.9×瓦当厚3.8	1		〔貼紙〕東福寺聖一國師開祖」建築ニ掛ル嘉禎年間ノ物」古瓦		歴史162東福寺及び仁和寺瓦28個	S11.10.10	明倫中学博物館より移管	
66	珠文縁東福寺銘軒丸瓦片	瓦当のみ，筒部削落す，珠文24	江戸前期(17C)	外径15.9×外区内縁径11.5×瓦当厚3.1	1				歴史162東福寺及び仁和寺瓦28個	S11.10.10	明倫中学博物館より移管	No.67と文字同版，珠文を追加
67	珠文縁東福寺銘軒丸瓦片	瓦当のみ，珠文12	江戸前期(17C)	外径16.0×外区内縁径11.5×瓦当厚2.3	1				歴史162東福寺及び仁和寺瓦28個	S11.10.10	明倫中学博物館より移管	No.66と文字同版
77	アイヌ織物機	①アツシを織る機，アイヌ語でアットゥシーカルーペ ②操行棒，アイヌ語でサマカップ		全長73.0	1		①〔木製付札表〕土人シクトル〔木製付札裏〕第三号ベカヲニク〔木製付札裏ラベル〕史シ」五四一〔貼紙〕ベカヲニク〔貼紙〕オー		地理286北海道アイヌ人衣服及用具8	T15.9.1	愛知県明倫中学校付属博館寄贈	

							サ〔紙製付札〕「シナ」ノ皮〔紙製付札〕アツシ②〔木製付札表〕土人シクトル〔木製付札裏〕第二号ザマカツフ〔貼紙〕ザマカツフ					
86	アイヌわらじ	アイヌ語でシトゥケリ，北海道胆振地方東部鵡川にて採集	近代	11.3×25.7×厚約2.0	2（1足）		〔付札〕シュプケイレ」膽振国ムカハニテ得」Shu Tu Keire MuKaWa, in the Iburi province		地理286北海道アイヌ人衣服及用具8	T15.9.1	愛知県立明倫中学校付属博物館寄贈	
135	アイヌカンジキ	楕円形，アイヌ語でテシマ		41.9×23.1×1.0	2（1足）		〔標本札〕ガンジキ」北海道土人ノ用具」雪上ヲ歩行スルニ用」フ」本館備品		地理286北海道アイヌ人衣服及用具8	T15.9.1	愛知県立明倫中学校付属博物館より寄贈	
136	アイヌカンジキ	瓢簞形，アイヌ語でチンル		45.9×21.8×3.4	2（1足）		〔標本札〕ガンジキ」北海道土人ノ用具」雪上ヲ歩行スルニ用」フ」本館備品		地理286北海道アイヌ人衣服及用具8	T15.9.1	愛知県立明倫中学校付属博物館より寄贈	
289	アイヌ樺製矢筒	本体樺製，蓋部分熊の皮製，アイヌ語でイカエフ		62.0×14.0×4.7	1				地理286北海道アイヌ人衣服及用具8	T15.9.1	愛知県立明倫中学校付属博物館より寄贈	
290	アイヌ矢	矢の下半分及び鏃を欠く，アイヌ語でアイ		長32.5×径0.8	1				地理286北海道アイヌ人衣服及用具8	T15.9.1	愛知県立明倫中学校付属博物館より寄贈か	

博物館の収蔵品の種類とその数について、私立明倫中学校校友誌『明倫』の記事によれば、「鉱物凡そ千三百四十余種、植物凡そ千六百余種、動物凡そ二千余種、其他歴史風俗及工業品等参考材料約二千余あり。」とあり、かなり大規模なものであった。[12]

明倫博物館は大正一五年(一九二六)に明倫中学校が愛知県に移管されるのに伴い閉鎖される。博物館の標本類の大部分は愛知県立明倫中学校に引き継がれたが、一部については学習院にも寄贈された。これは、当時の尾張徳川家当主義親が大正九年(一九二〇)より一年間学習院で生物学の教鞭を執った縁故によると推測される。

愛知県立明倫中学校に引き継がれた標本類のその後の状況であるが、愛知県立明倫中学校の後身である、現在の愛知県立明和高校には資料は所蔵されていないという。

明倫博物館より学習院に寄贈された資料のうち、二六七点が中等科生物学教室に収蔵されていることは、今までも知られていた。その内訳は、「愛知県教育博物館より寄贈標本目録」によると植物標本一五六点、動物標本一点、「愛知県立明倫中学校付属博物館より寄贈標本目録」分は植物標本一〇三点、動物標本七点である。

今回の調査の結果「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」の中にも明倫博物館寄贈資料があることが確認された。(表1)

その中でも特にアイヌ関係の資料には、資料の製作者名の記載や、資料のアイヌ語称の記載がある。今後これらの資料の明倫博物館への入手経路を判明することができれば、具体的には徳川義親と徳川農場のあった北海道八雲町との関係から、[13]記載されている製作者が八雲アイヌであることが特定できれば、製作場所、製作年、製作者の特定できるアイヌ資料としてかなり重要な資料となりうる。現在この点については調査をすすめているところである。

（四）発掘資料

資料の中には出土遺物もかなりある。そのほとんどは学習院輔仁会史学部による発掘調査時の出土遺物である。（表2）

今回の整理・調査において特筆すべき点として、付随調査として学習院高等科に保管されていた学習院輔仁会史学部の発掘調査出土資料の概要調査を行ったことを挙げることができる。

これは、「No.120等々力御嶽山古墳出土鉄剣、鉄鏃類」の調査を始めた段階で、鉄剣を復元するには破片が不足していること、同遺跡出土の短甲が『考古学雑誌』上紹介されたことがあるにもかかわらず[14]、現在どこにその短甲が保管されているのか不明であることなどから[15]、輔仁会高等科史学部（現在は休部状態）の発掘調査出土資料が現在どこにあり、どんな状況であるのかを調査した。その結果、輔仁会高等科史学部の出土遺物は何回かの移動の後に二〇年程前から高等科旧美術室の一室に雑然と放置されたままになっていることがわかった。そこで、高等科史学部顧問の内田義男先生、史学部OBの岡田茂弘先生ならびに史学部OB諸氏のご協力を得て、遺跡名と出土遺物の対応を行った。（この調査結果についても平成九年度（一九九七）発行の目録に付編として掲載する予定である。）

ここで少し、学習院輔仁会史学部について説明を加えておく。本誌掲載の徳川義宣氏の論考でも触れられているが、学習院輔仁会は学習院における課外活動の中心機関として、明治二二年（一八八九）四月六日に創設された組織である。当初は、編纂部、演説部、体育部など七部であったが、組織改編を繰り返し様々な活動を行うようになった。昭和三年（一九二八）一月には歴史と地理に興味を有するものにより史学会が創設された。

史学会の特筆すべき活動として、昭和一七年（一九四二）七月と翌一八年（一九四三）三月の喜多見御料地内の古墳の

表2　輔仁会史学部発掘調査資料

整理No	名称	内容	年代	法量	数量	地歴ラベルNo	添書き等	附属品	標本原簿	登録年月日	入手経路	備考
18	鎌倉市上杉やぐら出土木質遺物	鎌倉市犬懸上杉やぐらS30.8学習院大学史学部発掘調査時出土遺物／箸，薄板，木片，胡桃の種など	鎌倉	長10～20cm程度	一括						大学史学部発掘調査	
38	出土地不明土器片・骨片	①須恵器片1②土師器片1③骨片1	奈良～平安（8～9C）	①4.0×3.4×厚0.8②4.2×3.4×厚0.8③5.5×6.4×4.0	3						高等科史学部発掘調査	
96	富津市大満横穴群出土貝の化石など	千葉県富津市岩坂大満横穴群S27学習院高等科史学部発掘調査時出土遺物／貝・骨・土師など多数		木箱30.3×44.9×13.8	多数			ガラス板付木箱			高等科史学部発掘調査	『千葉県富津市岩坂大満横穴群調査報告書 富津市文化財調査報告書』(1973 富津市)／No.309同遺跡出土品
114	〔千葉県出土〕縄文土器片	縄文土器片(口縁部)3片中2片接合	縄文中期(加曽利E式)	6.2×5.2×厚1.5	1（2片接合）						高等科史学部発掘調査	荒屋敷遺跡出土品か？
115	喜多見7号墳出土鉄剣	世田谷区喜多見7号墳S17.7・S18.3学習院史学会発掘調査時出土遺物	4C末～5C初		1						学習院史学会発掘調査	『学習院史学会報復刊第一号考古学特集』(1949 学習院史学会)／No.119と一緒に梱包されていた

119	喜多見7号墳出土鉄鏃	世田谷区喜多見7号墳S17.7・S18.3学習院史学会発掘調査時出土遺物	4C末～5C初		1						学習院史学会発掘調査	『学習院史学会報復刊第一号考古学特集』(1949学習院史学会)／№115と一緒に梱包されていた
120	等々力御嶽山古墳出土鉄剣・鉄鏃など	世田谷区等々力御嶽山古墳S25.4.13～15学習院高等科史学部発掘調査時出土遺物	5C中頃		2						高等科史学部発掘調査	
123	喜多見7号墳出土木片	世田谷区喜多見7号墳S17.7・S18.3学習院史学会発掘調査時出土遺物	4C末～5C初		1						学習院史学会発掘調査	『学習院史学会報復刊第一号考古学特集』(1949学習院史学会)
127	採集地不明縄文土器片	口縁部2・胴部1	縄文中期	①4.0×5.4×1.5②4.1×6.0×1.4③3.5×3.2×1.1	3						高等科史学部採集	
147	千葉県長林寺台(田子台)遺跡出土石皿片	千葉県安房郡長林寺台(田子台)遺跡S25.3学習院高等科史学部発掘調査出土遺物，3つに割れているのを接合，図面によると4片あったが1片は欠	縄文前期	32.5×28.2×10.8	1						高等科史学部発掘調査	『貝塚』第43号

整理№	名称	内容	年代	法量	数量	地歴ラベル№	添書き等	附属品	標本原簿	登録年月日	入手経路	備考
234	等々力御嶽山古墳出土鉄片	世田谷区等々力御嶽山古墳S25.4.13～15学習院高等科史学部発掘調査時出土遺物	5C中頃		1			シャーレ			高等科史学部発掘調査	
275	採集地不明土器片	①円筒埴輪口縁部片1②縄文土器片1③④かわらけ片2	縄文・古墳・中世	①10.5×17.5×1.5②6.0×6.0×厚1.2③2.3×2.8×厚1.4④2.0×2.4×厚0.5	4						高等科史学部採集	
297	採集地不明貝	化石貝層より採集のもの，サザエ，イシダタミ，カキ，オオノガイ，バカガイ等			一括(21点)						高等科史学部採集	
280	堀之内貝塚等出土縄文土器片・貝・骨片等	千葉県市川市堀之内貝塚S25・26・30学習院高等科史学部発掘調査時出土遺物①縄文土器片(堀之内式・加曽利B式)7点②貝(オオノガイ・マガキ・サルボウ・ハマグリ?)4点 土錘1点(S29.4	縄文	ケース26.7×35.7×6.0	24			ガラス板付ケース			高等科史学部発掘調査	

		出土）磨製石斧片〔殿内貝塚〕・〔下組東貝塚（S25.12出土）〕③いのししの歯第2第3臼歯1点かめの甲羅1点鯛の頭骨1点その他鹿等7点（①～③）はガラス板付ケース）										
282	上本郷貝塚採集縄文土器片	口縁部1951頃採集か	縄文中期（阿玉台式）	7.6×7.5×厚1.4	1						高等科史学部採集	
283	出土地不明土師器片・骨片	①②③土師器片（甕）④鹿骨片	奈良～平安（8～9C）	①5.3×6.5×厚0.9②5.2×5.2×厚0.9③5.5×5.7×厚0.9④5.6×4.0×2.7	4						高等科史学部発掘調査	
309	富津市大満横穴群出土須恵器蓋	千葉県富津市岩坂大満横穴群S27学習院高等科史学部発掘調査時出土遺物	奈良時代（8C中頃）	径12.0×3.3	1						高等科史学部発掘調査	『千葉県富津市岩坂大満横穴群調査報告書 富津市文化財調査報告書』（1973富津市）に実測図あり／№96同遺跡出土品
310	館山市稲原貝塚出土骨ヒ	千葉県館山市稲原貝塚S25.3.15学習院高等科	縄文時代早期（茅山式）	10.9×2.6	1						高等科史学部発掘調査	『貝塚』第41号に実測図あり

整理№	名称	内容	年代	法量	数量	地歴ラベル№	添書き等	附属品	標本原簿	登録年月日	入手経路	備考
		史学部発掘調査時出土遺物										
311	〔等々力御嶽山古墳〕出土円筒埴輪片	世田谷区等々力御嶽山古墳S25.4.13～15学習院高等科史学部発掘調査時出土遺物か	古墳	(代) 15.5×10.7×厚2.3	6		〔添紙〕世田谷区等々力大塚山古墳出土(円筒埴輪)及附近出土物〔注記〕ヤヾロキ(一点のみ)				高等科史学部発掘調査	
312	喜多見7号墳出土坩片	世田谷区喜多見7号墳S17.7・S18.3学習院史学会発掘調査時出土遺物	4C末～5C初		1						学習院史学会発掘調査	『学習院史学会報復刊第一号考古学特集』(1949学習院史学会)
319	等々力御嶽山古墳出土短甲	世田谷区等々力御嶽山古墳S25.4.13～15学習院高等科史学部発掘調査時出土遺物	5C中頃		2						高等科史学部発掘調査,1996.1世田谷区より返還	

発掘調査を行ったことが挙げられる。この喜多見御料地は中等科の移転予定地で、宮内省所有地のため一般の立ち入りが制限されており、学習院のみが発掘調査を行うことができた。発掘の結果、鎹、玉、鉄刀、鉄鏃などが出土している[16]。

この調査の際の出土遺物についても、長くその存在が不明であった。史料館にも「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」として鉄製遺物が雑然と入っていた木箱が二箱放置されていたが、この遺物がどこの遺跡のものか分からずに

いた。今回の調査の結果、初めて喜多見七号墳と等々力御嶽山古墳の出土遺物であることが、判明した次第である。[17]

史学会は昭和一八年(一九四三)二月の輔仁会改組の際に、中等科・高等科に分離し、中等科は「地歴班」となり、高等科は「史学部」となった。史学部はその後精力的な活動を行い、前述の等々力御嶽山古墳をはじめ、市川堀之内貝塚や誉田高田貝塚など数々の発掘調査を行った。しかし、その大半については発掘調査報告書の刊行までには至っていない。遺物の整理についても中途で終わってしまっているものが多い。発掘に関係した部員が卒業していき、その後資料は歴史地理標本室や史学部の部室に放置されたままになっていたわけである。

今回、概要調査を行ったことにより、高等科としても今後も資料を積極的に保管していくこととなり、平成九年度(一九九七)竣工の新高等科校舎にも資料保管用の一室を設置することとなった。[18]

おわりに

以上、今年度調査を行った「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」について、資料群としての特色、入手経路別の個別資料の紹介を行ってきた。

一　教育研究資料群としての「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」で述べたとおり、「旧制学習院歴史地理標本室」という組織の存在が確認され、その中の収蔵品が、「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」として今回ほぼ一括の形で保存、整理、研究されるということが、教育史的にも博物館学的にも先進的な試みであること、コレクションの内容としては、戦前の日本の体制を現わす一側面としての性格があることを述べた。

二　「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」の入手経路別分類とその例においては、(一)購入、(二)移管、(三)寄贈、(四)発掘の四種の入手経路分類ができ、その一つ一つにそれぞれ特色があることを述べた。

今回は、「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」群としての特色と入手経路別の特色を述べるにとどまったが、個々の資料に掘り下げるべき課題がまだまだ多く残されている。その課題一つ一つを解明することにより、この「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」は大きな研究の広がりをみせるであろう。

目録の公開とともに、個々の資料の掘り下げも、今後とも継続して行っていきたいと考えている。皆様からのご教示、ご叱責をお待ち申し上げている。

この「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」の整理にあたり、各方面より、様々なご教示、ご指導、ご協力を賜った。末筆ながら記して謝意を表わしたい。

〈調査協力者(敬称略　五〇音順)〉　赤澤威　秋道智彌　秋元昭二　上野しのぶ　内田義男　大橋康二　岡崎博之　岡田茂弘　小泉和子　小林貴男　小堀信幸　小松大秀　金光英子　桜井茂男　桜井伸　佐々木利和　篠沢治子　鈴木真弓　高橋昌子　田中一樹　谷本晃久　鶴間和幸　徳川義宣　長佐古真也　西村進　浜田耕策　林雄介　久末康一郎　深津行徳　松崎元樹　諸星真澄

註

(1) 『学習院百年史』(昭和五六年三月三一日　学習院百年史編纂委員会)

(2) 院史資料室収蔵資料は現在百周年記念会館展示室に展示されている「唐俑」五体。そのうち一体に『学習院歴史地理標本室1361』のラベルの貼付がある。これは『標本原簿(歴史)』中「登録番号六五　唐美人土偶　大正一四年八月二日」に該当。

東洋文化研究所収蔵資料は東洋文化研究所に残されていた末松保和先生の資料中より発見された。

「扇子」(『学習院歴史地理標本室1381』のラベル貼付、『標本原簿(歴史)』中「登録番号七一　扇子(排日宣伝用)　大正一四年九月一四日　金田鬼一寄贈」)

「呉道子孔子像拓本」(『学習院歴史地理標本室1158』のラベル貼付、『標本原簿(歴史)』中「登録番号三三　呉道子孔子像拓本　大小　大正一三年三月一二日　大谷勝真寄贈」)などがある。

(3) 目録には「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」の全目録、『標本原簿』を筆耕した一覧、輔仁会史学部発掘調査一覧を掲載する予定である。

(4) 岡田茂弘「ユニバーシテイ・ミュージアムの必要性と構想」(『東京家政学院生活文化博物館年報』第三・四合併号　一九九六)

(5) 『学習院歴史地理標本室』のラベルは四桁の数字が記入されている場合と、ごく稀に標本原簿の登録番号がそのまま記入されている場合とがある。

(6) 島津製作所の販売カタログ『目録　地理と歴史』は島津創業記念資料館展示品の昭和五年(一九三〇)発行のものの他に京都科学所蔵の昭和一二年(一九三七)のものの存在が確認されている。

(7) 『原色陶器大図鑑』(加藤唐九郎　一九七二　淡交社)

(8) 東京大学総合研究博物館の高橋昌子氏のご紹介によるものである。平成八年(一九九六)秋に東京大学総合研究博物館において同種の人形を実見し、その由来を問い合わせたところ、青森県立弘前中央高校福井敏隆氏の論文「元祖博多人形—井上式地歴標本—」(『紀要』平成七年度　青森県立弘前中央高等学校)を紹介された。その論文より金光図書館所蔵の博多人形の存在を確認することができた。

金光英子「世界と日本の風俗人形」(金光図書館報『土』一一八　一九八七)

(9) 『高松宮日誌』第二巻(一九九五　中央公論社)
(10) 「アバイ」とはパラオ島の青年男子集会所のこと。高床式で破風作りの屋根を有し、壁面にその村固有の物語が絵文字にて表記されている。
(11) 本号収載岡田茂弘「史料館所蔵の瓦経と有銘磚」注2参照
(12) 私立明倫中学校校友誌『明倫』第一五号(明治四二年(一九〇九)中「博物館沿革」
(13) 徳川義親と北海道八雲農場(現八雲町)域のアイヌとの間には親密な関係があった。徳川義親『熊狩りの旅』(一九二一　精華書院)
(14) 田中新史「御嶽山古墳出土の短甲」(『考古学雑誌』六四巻一号　一九七八)
(15) 一九九四年に松崎元樹氏に調査を依頼した後に、世田谷区立郷土資料館に貸し出されていることが判明した。
(16) 内藤政光「武蔵喜多見古墳発掘報告」(『学習院史学会報』復刊第一号　一九四九)
(17) 喜多見七号墳出土の鏡、玉と等々力御嶽山古墳出土の玉二点については、未だその所在が不明である。
(18) 高等科史学部資料に関する質問などは、史料館にお問い合わせください。